

静けさの知覚と知覚における因果

源河 亨 (Tohru Genka)

慶應義塾大学文学研究科

本発表の目的は、音の不在(absence of sounds)である静けさ(silence)は知覚されるものであると主張するとともに、その検討を通して、知覚と対象の間の因果関係を考察することである。本発表のテーマは、不在の知覚(perception of absence)と知覚の因果説(the causal theory of perception)である。

机を見る、皿が落ちた音を聞く、といった経験は、知覚を考察するとき典型的に扱われるものである。このような知覚が成立しているとき、反射光や音波などの物理的な刺激が感覚器官の反応を引き起こしている。このことから、ある対象についての知覚が成立するためには、その対象と主体の間に物理的な因果関係がなければならないと考えられるかもしれない。

本発表の第一の目的は、知覚が成立するために、このような物理的な因果関係は不可欠ではないと主張することである。というのも、静けさは知覚の対象になりうるものであるが、聴覚系が刺激されないこと、つまり、物理的な因果関係がないことによってその知覚が成立するからである。

まずは、静けさは聴覚の対象であると主張する Sorensen (2008) *Seeing Dark Things* の議論を紹介しよう。Sorensen によれば、静けさは、音がないことから推論されているのではなく、音の不在についての聴覚経験を持つことによって意識に現れている。その根拠は、静けさは知覚対象が持ついくつかの特徴を備えているということであるが、特に重要なのは、非認識的(non-epistemic)知覚の可能性、そして、知覚の対象への反事実的依存(counterfactual dependence)である。

非認識的知覚とは、Dretske の *Seeing and Knowing* で主張された信念を含意しない知覚のことである。Seeing that P で表される認識的知覚は P と信じることを含意するのに対し、非認識的知覚は、P と信じることも、信じないことも、さらに、信念を持たないことも両立する。Sorensen によれば、主体が静けさを知覚していながら、静かであると信じていない状況が存在しうる。

知覚の対象への反事実的依存は、これら二つの間には因果的共変関係が成り立っていないからである、という Lewis の知覚の因果説によるものである。そして、静けさもこの条件を満たす。というのも、静けさとその知覚の間にも「もし静けさが存在しなければ静けさは知覚されない」というような関係が成り立っているのからである。

しかし、静けさの知覚可能性については次のような反論がある。静けさは音の不在であるため、もし知覚されるならば、その知覚経験は「音がない」という否定的内容を持つことになるだろう（光の不在である影や暗闇の知覚においては“黒い色がある”

のに対して、静けさはいかなる高さ・大きさ・音色も持っていない)。しかし、知覚経験は「～がある」「～が起きている」というような肯定的内容しか持てない。否定的であることが可能なのは、知覚内容ではなく、記憶や期待と知覚とを比べた際の判断内容である。そのため、静けさは知覚できるものではない。

この反論に答えるためには、静けさは何らかの肯定的なものとして知覚されていると考えなければならないだろう。そのために本発表は、静けさの知覚を図と地の反転やゲシュタルトスイッチを使って特徴付ける。反転図形において、図と地の知覚が反転すると、それまで背景だったものが対象として、対象だったものが背景として知覚される。同様に、音と静けさも図と地の関係をなしており、静けさが図となると、単なる不在ではなく何らかの対象や事象として知覚されると考えられる、ということである。

もし静けさが知覚されるなら、知覚が成立するために物理的な因果的關係は不可欠ではないということになる。というのも、聴覚系の反応を引き起こすいかなる物理的刺激も、静けさから主体に与えられていないからである。

では、物理的ではない因果關係はどうだろうか。Sorensen は、静けさの知覚可能性と知覚の因果説を用いて、不在因果が存在すること、そして、不在が因果的効力を持つことを主張している。その論証は次のようになる。知覚の因果説によれば、知覚は対象によって因果的に引き起こされるものである。そのため、静けさが知覚されるならば、静けさは知覚を引き起こす因果的効力を持っている。そして、静けさは音の不在であることから、不在が因果的な効力を持つことが帰結する。

しかし、不在が因果的効力を持つかどうか、また、不在因果が真性の因果關係かどうかについてはさまざまな対立がある。本発表の第二の目的は、静けさの知覚可能性は不在が因果的効力を持つことの根拠になるのか、という問いを検討することである。私は以下の二つの点から、この問いに対して否定的である。

第一に、静けさが知覚されるためにゲシュタルトスイッチが必要であるという点である。ゲシュタルト心理学者たちは、図と地やゲシュタルト知覚が成立するためには知覚内容を決定する能動性を知覚自体が持っていなければならない、という点を強調している。つまり、図と地やその反転が可能になるためには、主体の何らかの心的作用が必要であると考えられるのである。従って、静けさは、静けさからの因果的効力ではなく、主体の心的作用があることによって知覚可能になっていると考えられる。

第二の点は、素朴实在論(*naive realism*)との関連である。素朴实在論によれば、知覚は主体と対象との基礎的な關係であり、主体が持つ知覚経験と、知覚と対象の因果關係という二つの要素に分解することはできない。しかしながら素朴实在論者は、静けさが知覚されると考えるために挙げた上記の特徴付け、非認識的知覚、知覚の対象への反事實的依存、ゲシュタルトスイッチを認めることができる。そのため、静けさと主体の間の因果關係を否定しながら、静けさの知覚可能を認めることができるのである。